安部巌先生追悼記

別府の遺物

埋没三百年の像（遺稿）

（故）安部　巌

安部巌先生が亡くなられて、今年（二〇〇二年）で早くも十三回忌を修したという。

先生は、藤内喜六先生らとともに、本史談会の創設に尽力されました。今年五月、形だけの「創立十五周年」記念を祝した折に「先生が今日生きておられたら」との声がしきりに語られました。

荒金進先生の「弔辞」に見えますように、先生は郷土史を基軸にした教育の確立に情熱を燃やしておられました。

志なかばで逝かれた心情を思うとき、溢れ出る涙を禁じ得ません。どうか後顧の憂いなく安らかにお眠り下さい。

合掌

平成十四年　盆

別府史談会役員一同

別府の南端を東流する朝見川に沿って、人の生活は絶えまなく続けられて来たが、私はその川筋に沿って続く数限りなき遺址遺構にふれ、かってこの地に暮した人々が様々な体験をなめながら、今日の河畔の繁栄を築きあげたことを思う時、昔の人に対する身近な、なつかしさが湧き起るのをどうすることも出来ない。

ここに至るまで幾世紀かの人の暮しには、喜びも悲しみも憂いも涙もあっただろうが、それらが一つ一つ積み重ねられて今日の「文化」を築いたのである。こう考える時、最早や単なる遺址遺構ではなくて、当時の生きた人々に連なる遺址遺構であることに思いが及ぶのである。

然し、これ等を骨とう趣味で見ようとする人がいる。遺物を商品として見ようとする人がいる。また、全く振向きもしない人もいる。それは、見る人の心々にまかせて自由であるかも知れない。だが、過去の遺物が埋もれることは悲しいことである。

さて、附近の遺址を概見しよう。

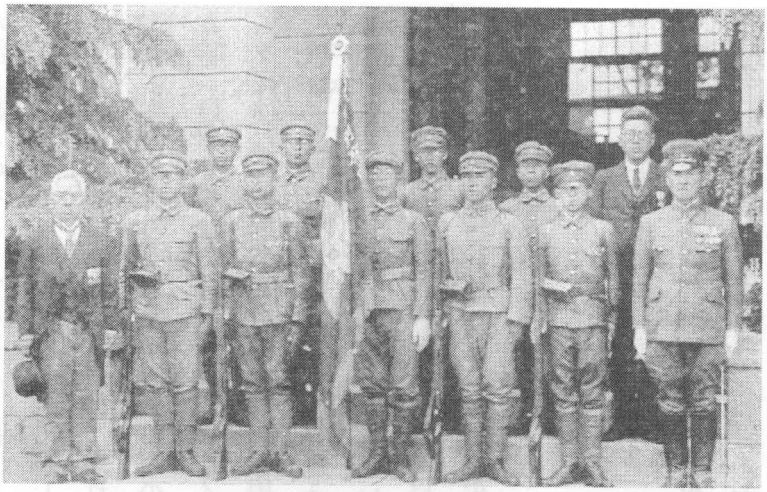
朝見川の東端浜脇台地の臨済禅の崇福寺に始まって、古墳出土品を蔵する修福寺、別府最古の寺院宝満寺、金

比羅山古墳群、天正九年の地蔵塔、曹洞禅長松寺、学校教育最古の遺構別府学校、大友能直にまつわる八幡朝見神社、中世の寒鍋山城址、史話に満ちた吉備山・耳取山、さらに応永三年の板碑、寛永キリシタン遺址群、庄内街道、八坂神社に見牛の丘、大友氏時創始の龍源山吉祥寺、観海寺。海雲寺、石垣原合戦にまつわる宗像掃部の墓、彗解山、立石山と一連の史址遺構の数々が、あるいは原形を留めぬ道址として、あるいは苔むした遺物として、あるいは緑の木蔭に昔を語りつゝ残る遺構として、過ぎ去った時代の影を鋭く刻みながら、朝見川の本流に沿って西に長く伸びているのである。

思えば、長き日本の歴史が留まるべき場所を、朝見川畔に見出して小さく展開した、と考えられるのではあるまいか。

一九五七年の今、観海寺の高台から朝見河畔を望見すれば、銀白色に光る清流に沿って一連に並ぶ緑の森が視界に入る。

そこには、室町時代乱世の餘波を受け大友・大内の争乱に巻きこまれた吉祥寺の悲劇の森が見え、さらに目を転ずれば一五九六年（慶長五）石垣原の合戦に暗愚義統にしたがって空しく戦場の露と消えた宗像掃部の丘が望まれ、断圧につぐ断圧に抗してひそかに信仰を続けたキリシタンの森も見える。



▲別府中学校在学時「御親謁拝受」記念に玄関前で
昭和14年（1939）

苦しみに満ちた歴史の址である。

しかし、人は過去の歴史を美しく見ようとする、何故だろうか。苦しさを忘れたいからだ、苦しさから遠ざかりたいからだ、苦しさがマイナスの想いで常に人に迫っているからだ。それは逃避となり、空しいあきらめとも

なる。

ともあれ、我々は現実を直視しなければならない。直視するとき、一つ一つの巨石に営々の労苦を見出すことが出来る。見事な遺構に血のひらめきがきこえ、さらにまた一つの文書、一つの遺物が当代の相剋(そうこく)の中から今日まで辛くも生きのびて来たことが伺えるであろう。

思えば時の流れに順応し、また抗し、今日まで幾百年幾千年も人は生活し続けて来たのである。

〝埋没三百年の像〟

▲晩年の安部巌先生（1921－89）

朝見川畔の森もキリシタン断圧の嵐に見舞れねばならなかった。断圧につぐ断圧。だが、この森は強靭な信仰を持つキリシタンを守った。

牧師は、ひたいに十字の焼鏝(やきごて)を当てられた。信者はこの森陰でひそかにその犠牲者の像を刻んだ。何のために……、信仰を続けるために……。出来上った像は向うむきに石垣に積みこまれた。ひそかに造られた礼拝堂、外見は平静な石垣である。かくされた像……埋没三百年。

今はなき像を刻んだ、その人の手は震えていただろう。両眼には次々と殺害され行く信者の姿が写ったことだろう。また石垣に積み込んだその瞬間、どんな境涯だったろうか。これが生々しい人の暮しの一こまでなくて何であろう。

像を刻んだ人の子孫は誰が生きているだろう。しかし、その誰かは自分の祖先の信仰を知らないのである。

星移り世は変って三百年、台風はこの石垣をとりこわし、陽光の下にこの像を置いた。この石像からズルズルと近世のキリシタン断圧史は解明されることだろう。

近代観光都市として発達する別府の一隅に一連の哀史を秘めて森は連なる……。